E-7

敬語表現の統一的説明に向けて

大野　公裕

1．本発表の主張

(1) 「お／ご～になる」(尊敬表現；Subject Honorification, SH)

a. 先生が論文を**お**書き**になった**。

b. 先生が**ご**出席**になった**。

(2) 「お／ご～する」(謙譲表現；Non-Subject Honorification, NSH)

a. 花子が先生を**お**招き**した**。

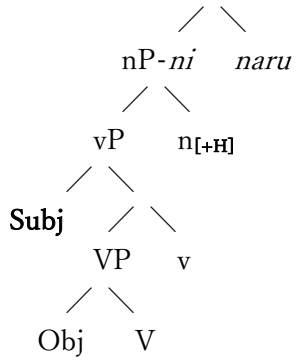
b. 花子が先生を**ご**案内**した**。

敬意の対象となる名詞句＝“SSS” (a person “socially superior to the speaker,” Harada 1976)

本発表では、(1)の尊敬表現（SH）と(2)の謙譲表現（NSH）はそれぞれ概略(3)と(4)に示した基底構造を持つと仮定し、SSS の決定に関して統一的説明を提案する。

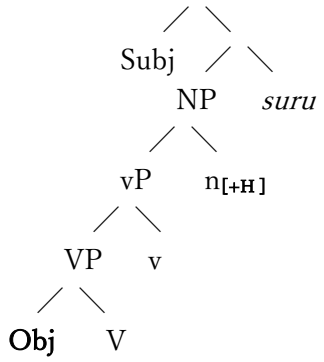
(3) 尊敬表現（SH）

先生が論文をお書きになった。



(4) 謙譲表現（NSH）

花子が先生をお招きした。



(5) a. SH における「なる」は上昇動詞、NSH における「する」はコントロール動詞である。

b. 敬語接頭辞の「お／ご」は vP を補部にとる名詞化形態素（nominalizer）n に付与された敬語素性（honorific feature, [+H]）が PF で具現したものである。

c. 分散形態論に従い、統語論における主要部移動によって形成された“V-v-$n_{[+H]}$”の連鎖は PF での語彙挿入（Vocabulary Insertion）により“お／ご-V-v”として具現する。

d. SH における vP 補部は主語（外項）を持つが、NSH における vP 補部は主語を持たない。

e. 最小探査（minimal search）によって[+H]から最も近い NP が SSS として選ばれる。

2．仮定の検討

・(5a)～(5c)の仮定は基本的に Toribio (1990), Hasegawa (2006)と同様。

(5a)について：「SH における「なる」は上昇動詞、NSH における「する」はコントロール動詞である。」

・敬語表現とは独立の仮定。

(6) a. 太郎が医者になった。→［X が Y に］なる（非対格動詞）

b. 花子が先生の案内をした。→X が［Y を］する（他動詞）

(5b)について：「敬語接頭辞の「お／ご」は vP を補部にとる名詞化形態素（nominalizer）n に付与された敬語素性（honorific feature, [+H]）が PF で具現したものである。」

・敬語接頭辞「お／ご」は名詞、形容詞（形容動詞）に付くが、動詞には付かない。

(7) a. お金、ご病気
b. お美しい、お元気な
c. *先生は論文をお書いた。

→「お／ご」は範疇化形態素（categorizer）の n または a に随意的に付与される素性[+H]の具現形であると仮定する。

(5d)について：「SH における vP 補部は主語（外項）を持つが、NSH における vP 補部は主語を持たない。」
・NSH における「する」は主語（外項）を持たない「再構成」（restructuring）補部をとっている。

(8) a. 太郎は［窓を閉め］忘れた。（統語的複合動詞：他動詞型コントロール動詞）
b. 窓が閉め忘れられた。（長距離受身）
(9) ___［$_{vP}$ PRO［$_{VP}$ 窓が 閉め］v］忘れ-られ-た

T による主格付与を PRO が阻止→PRO 主語は存在しない（cf. 影山 1993）。
➡長距離受身が可能な補部は主語（外項）を導入しない再構成補部である（cf. Wurmbrand 2001）。

(10) a. 花子は先生をパーティーにお招きした。（謙譲表現）
b. 先生がパーティーにお招きされた。（長距離受身）
(11) 花子は［［$_{vP}$［$_{VP}$ 先生を パーティーに 招く］v］$n_{[+H]}$］する

ただし、vP 補部は動作主的でなければならない。
(12) a. 佐藤先生｛が／に｝学生が**お**わかり**になる**。（SH）
b. *学生｛が／に｝佐藤先生が**お**わかり**する**。（NSH）（Hasegawa 2006: 520）

(5e)について：「最小探査（minimal search）によって[+H]から最も近い NP が SSS として選ばれる。」
・Toribio (1990), Hasegawa (2006)などでは、指定部－主要部の一致（Spec-head agreement）により SSS が決定する。しかし、Chomsky (2004)以降、指定部の概念は破棄され、それに伴い、一致操作（Agree）は探査子（probe）－目標（goal）の関係で述べられるようになった（敬語における一致については Boeckx and Niinuma 2004, Niinuma 2003 を参照）。

(13) a. ［［$_{vP}$ 先生が 論文を 書く］$n_{[+H]}$］に なった（SH）
b. 花子が［［$_{vP}$ 先生を 招く］$n_{[+H]}$］した（NSH）

・SSS の決定は、SH と NSH のいずれにおいても $n_{[+H]}$からの最小探索という同じ操作によって行われる。
・$n_{[+H]}$から最も近い NP が SSS として選ばれるので、SSS が SH では主語、NSH では（通常）目的語になることが自動的に説明される。

3．誤用分析：尊敬表現としての「お／ご～する」

(14) 「お／ご～する」
a. ご利用してますか、レタックス

b.　スーパーMMC がグンとご利用しやすくなるというお知らせです。（菊地 1997: 293）
c.　受付でお聞きしてください。（井上 1999: 126）

(15)　「お／ご～される」
a.　先生もこの店をよく御利用されるんですか。（「敬語の指針」2007: 36）
b.　ひかり電話を新しくご契約されたお客さま
（https://support.ntt.com/ocn/support/pid2900000s67）
c.　若いうちにご契約されたほうが、少ない負担で終身の保障を確保できます。
（https://www.af-direct.jp/syusin/）

(16)　「お／ご～できる」
a.　御乗車できません。
b.　お求めできます。
c.　ご契約の内容をご確認できます。
（https://www.meijiyasuda.co.jp/contractor/myhoken/01.html）

★「する」→（コントロール動詞ではなく）上昇動詞（非対格動詞）

(17)　「ご利用する」
［［$_{vP}$ X が Y を 利用 v］$n_{[+H]}$］する（「する」は通常の（主語を持つ）vP 補部をとる）

(18)　非対格動詞としての「する」：
a.　頭痛がする。
b.　変な音がする。
c.　夏が終わろうとする。

(19)　「ご利用される」
［［$_{vP}$ X が Y を 利用 v］$n_{[+H]}$］する＋られ（尊敬）［する＋られ→される］

(20)　「ご利用できる」
［［$_{vP}$ X が Y を 利用 v］$n_{[+H]}$］する＋られ（可能）［する＋られ→できる］

《予測》非対格動詞補部も可能（謙譲表現の「お／ご～する」との違い⇒(12)参照）

(21)　a.　来週の日曜日に消防設備等の点検に伺いますが、御在宅する必要はありません。
（「敬語の指針」2007: 38）
b.　○○学園へご入学するみなさんへ　住まいのご案内
（http://www.gakuseikaikan.com/dp/hana/index.html）
c.　（あるレストランで帰ろうとしたら、ウエイターが）
ランチにはコーヒーがお付きしますが。（井上 1999: 135）
→［［$_{vP}$（あなたのために）ランチにコーヒーが付く］$n_{[+H]}$］する

(22)　a.　明日は、お休みされますか？
b.　先生はいつご到着されますか？
c.　先生はご出席されますか？

4．今後の課題

＜理論的問題＞

・SSS の決定のメカニズムを精密化する。
Kishimoto (2012)：項である NP が解釈可能な[+H] 素性を付与され、尊敬接辞 H が解釈不可能な[+H]素性を付与される。H を探査子とする一致操作により H の解釈不可能な[+H]が削除される。

(23) [... $NP_{[+H]}$ ...] $H_{\cancel{[+H]}}$

Kishimoto (2012)の問題点：
(24) 先生が 論文を 書いた。→「先生」が SSS として解釈されてしまう。
[+H]

→敬語素性「お／ご」の認可は一致ではなく、格付与に近い。
(25) [... $NP_{[uH]}$ ...] $n_{[+H]}$
一致操作により、[uH]→[+H]
(26) 先生が 論文を 書いた。
[uH]
一致操作により値を付与されなかった[uH]→[–H]（デフォルト）

＜経験的問題＞
・SSS の決定における SH と NSH の非対称性
(27) a. X が［$_{vP}$ Y に Z を届ける］$n_{[+H]}$ する（NSH）
b. ［$_{vP}$ Y に Z が届く］$n_{[+H]}$ になる（SH）
(28) a. 先生のご自宅に荷物をお届けします。
b. *先生のご自宅に荷物がお届きになります。

【参考文献】
●Boeckx, Cedric and Fumikazu Niinuma. 2004. Conditions on agreement in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 22: 453-480. ●文化審議会. 2007.「敬語の指針」●Chomsky, Noam. 2004. Beyond explanatory adequacy. In *Structures and beyond: The cartography of syntactic structures, vol. 3*, ed. by Adriana Belletti, 101-131. Oxford University Press. ●Harada, Shin-Ichi. 1976. Honorifics. In *Syntax and Semantics 5*, ed. by Masayoshi Shibatani, 499-561. Academic Press. ●Hasegawa, Nobuko. 2006. Honorifics. In *The Blackwell Companion to Syntax*, 493-543. Blackwell. ●井上史雄. 1999.『敬語はこわくない』講談社. ●影山太郎. 1993.『文法と語形成』ひつじ書房. ●菊地康人. 1997.『敬語』講談社. ●Kishimoto, Hideki. 2012. Subject honorification and the position of subjects in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 21: 1-41. ●Niinuma, Fumikazu. 2003. The syntax of honorification. Doctoral dissertation, University of Connecticut. ●Toribio, Almeida. 1990. Specifier-head agreement in Japanese. In *Proceedings of the Ninth West Coast Conference on Formal Linguistics*, 535-548. CSLI. ●Wurmbrand, Susanne. 2001. *Infinitives: Restructuring and clause structure*. Mouton de Gruyter.

［所属］北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
［E メール］ohno@imc.hokudai.ac.jp